其位六ヶ敷困難なものであるのに、三年か五年の間にドウモ去年より一向進歩が見えないなど言ふは、世間の人位い無理なものはない、《小生は言ふ否單に世間の人に限らず、己れ自身も此種の一人にあることあり。》ソレデ會員は氣を長くお持ちなさいといふことを忠告する。

我等書生にとり、右の如き教訓は確に光明に達すべき燈かと存候、徒に右の約束を缺き、如何に世間に向つて運動を試みるも、博物館や美術學校に向つて運動をしたからと云ふて、別に腕が下らうとも上ることはない、故に唯々右の約束を守つて行けば進歩することは確であると、氏の言は愈我が肺腸に染み入りて無限の力を得申候。

廣き世間には斯くも親切に誘導なし呉れる人さへあり、必ず氣を長くすべし、一夜造りの家は一朝の嵐のため吹き飛さるゝにあらずや。

我青年畫家の、旭の勢ありしものが、年々歳々其技倆下り、西山日没の姿を呈するは、即ち林氏の所謂約束に依つて出來上らざりし證據には無之候哉。

大器晩成。誠に三年や五年位にて、其好果を見むと欲する者は到底日本の基礎ともなるべき美術の創作家にあらずして、一夜に咲き亂れたる野の花の如く根もなく葉もなきものに候。

一年に一寸の進歩は是れが即ち妙奥に達するの途にして、決して他に求むべきものなし、世の青年有望の畫家神童と稱せらるるものでさへ、年々歳々一分の進歩を見る能はざるのみか却て一寸一尺の退歩を見るにあらずや、小生の如きはタトヘ進まぬ迄も退歩せざれば滿足する考なり。

山あり川あり谷あり又平原ある幾百里の旅路、唯々先へ達することのみ思ふて進む人は、終に疲勞に堪へ兼ね到底其半途にも達する能はざるべし、悠々然として一歩又一歩、遂に怠らざる人こそ何時かは其目的地にも達し得べしと存候。

小生若し、我等が一年一寸、否一分の進歩あればその喜悦之に過ぎざる事に候、幸ひ我々の光明とも稱すべき一大教訓は、林氏を透して明治美術會報告書に出づ、

小生は近來珍らしき忠告として林氏の演述に感じたると同時に、兄等と共に研究いたしたく聊か其所感を陳ぶ如此候。

三十二年五月　札幌にて

當地にて尤も廣く行はるゝ蝮蛇に咬まれた時の治療法は竹の空洞にミヽズを入れてそれに石灰水を入れると見る間にミヽズは溶けるそれを山に携え行き蝮蛇に咬まれた時は其水を傷につけると直ぐに腫れが退き治愈する當地方は山間であるから種々なる豫防法も行はれてゐます　（二戸T、T、生報）